





真夜中のサーカス

昭和四十八年六月二十日 印刷
昭和四十八年六月二十五日 発行

著者 三浦哲郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号一六二

電話東京(三)三〇一三二

振替東京八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 新宿加藤製本

定価七〇〇円

(落し本はお取替えいたします)

真夜中のサーカス

木戸が開く前に 7

綱渡り 23

パレード 41

魔術 59

寸劇 81

パントマイム 107

スポットライト 123

檻 141

空中ブランコ 159

シンタの嘆き 177

鞭の音 193

赤い衣裳 209

小人の曲芸 231

火の輪くぐり 257

装帧・插画
司修

真夜中のサーカス

木戸が開く前に

その犬を、町で最初にみかけたのは新聞配達の少年であった。いつものように、インクの匂いのぶんぶんする朝刊を自転車荷台にとっさり積んで、錆びたブレーキを遠慮がちに鳴らしながらまだ寝静まっている町へ降りていくと、しらしら明けの街道のむこうからのそのそとやってくるその犬に出会った。

大きな耳が顔の両側にだらりと垂れ下っている赤犬であった。

新聞配達少年は、町に棲みついていて犬は一匹残らず知っている。戸数二千数百、人口一万にも満たないちいさな港町である。どの路地にはどの犬がいて、それがどんな尾の振り方をするか、どんな吠え方をするかということまで、よく知っている。

彼は、その赤犬を一目みて、あいつ、どこからか迷い込んできたよそ者だなと思った。歩き方をみて、すぐにわかった。

ところどころ罅の走っているコンクリートの街道には、魚市場から魚を運び出すトラックの

荷台の両側からしたたり落ちる魚の血が染み込んで、幅の広いレールのような縞が出来ている。赤犬は、珍しそうにその縞の匂いを嗅ぎながらやってきたが、町に棲みついていて犬なら、仔犬でもそんな野暮な真似はしない。

すれ違って、なんて耳の大きな犬だと彼は思った。町にも赤犬は沢山いるが、こんなに耳が垂れ下った奴をみるのは初めてであった。もうすこし首を垂れると、鼻よりも耳の方が先に地面に届きそうだ。

彼は、なんとなくその耳に親しみを覚えて、自転車のスピードを落とすと、赤犬の方へ口笛を一つ鳴らしてやった。すると、赤犬は突然思いがけない態度に出た。それまでは脇目も振らずに道を嗅ぎながら歩いていたのに、急にわれに返ったように立ち止ると、彼の方へ向き直って、チンチンをした。

それが、実に堂に入ったチンチンであった。腰が据わって、背骨がしゃんと伸びている。上げた前肢も、ちょっと内側に寄せて、胸の前で両手を組むようにしていると、洒落ている。

少年はびっくりして、あやうくハンドルを切り損ねるところだった。思わず片足を地面に突いて、呆気にとられてみると、赤犬は、なんだ、無駄骨かというふうにチンチンをやめて、また魚の血の縞を嗅ぎながらむこうへ歩きはじめた。

正直いって、彼はすこし気味が悪かったが、自分を励ますためにもういちど口笛を鳴らそうとした。けれども、どうしたことか口笛はうまく鳴らなかった。彼は、首を一つひねって、また自転車走らせた。

おかしな犬だったな、と彼はベダルを踏みながら思った。あんな見事なチンチンをする犬、みたことがない。まるでサーカスの犬みたいな芸当をする。あの犬、まさかサーカスから逃げてきたんじゃないな。

けれども、もうすぐ冬だというこんな季節にサーカスがやってくるはずがなかった。勿論、近くの町にサーカスがきているという噂も聞かない。

すると、どこかのいい家で厳しく仕付けられた犬なのだろうか。そんな犬が、どうしてこんな北国の殺風景な港町なんかに流れてきたんだろう。人に飼われていることに厭気がさして、放浪の旅に出てきたのだろうか。あの犬は、確か首輪をしていなかった。よくも首輪から抜けてこられたものだ、あんな大きな耳をしていて。

少年はそんなことを考えていて、うっかり、最初に新聞を入れる家の前を通り過ぎたことに気がつき、Uターンした。そのときはもう、路地から朝日が射しはじめた街道には、どこにも赤犬の姿がみえなかった。

その日、新聞配達達の少年のほかにも、町でおなじ赤犬をみかけた人が何人かいた。魚市場の事務所の老人もその一人だが、火鉢に溜まった煙草の吸殻を集めて裏のゴミ捨て場へいくと、そこでみたこともない赤犬が魚のはらわたを嗅いでいた。

初め、朝日を浴びている瘦せこけた腰と尻っぱが、色といい形といい、狐に似ていて、ぎくりとしたが、耳は似ても似つかない。老人は、ほっとしたついでに、
「おめえ、どっからきた犬じゃ？」

と声をかけた。

けれども、犬に答えられるわけがない。赤犬は、目尻の下った憂鬱そうな目で老人を一瞥したきりだった。

「そんなものを食うも食わぬも、それはおめえの勝手だが。」

と、老人は吸殻を捨てながらいった。

「食ったら腹んなかに虫が湧くぞ。わしは知らんぞ。」

老人はそのまま事務所へ引き返したので、赤犬が魚のはらわたを食ったかどうかは知らない。

午ごろ、町の駅の駅員が、ちいさな駅前広場の隅にある便所の裏の陽溜まりに、赤犬がぐったりと寝そべっているのを窓越しにみた。二時ごろ、浜に近い湧き水の川べりで洗濯をしていた女たちが、川下へ水を飲みにきた赤犬をみかけた。

「いやあ、縫いぐるみにしたいような犬。」

歌い手かぶれの娘がそういうと、それがきこえたかのように赤犬は早々に立ち去った。

夕方、漁師町のはずれの家で、焼酎に酔ってごろ寝をしていた漁師の若者がふと目を醒ましてみると、裏の砂浜に筵を並べて干してある鰯を赤犬が食っている。

「おい、こら。しっ。」

と彼は嗚鳴り声を上げたが、赤犬はちらとこっちをみたきりだった。

「おい、こら。しっ、しっ。」

彼はまた叫んだが、効き目がなかった。赤犬はせっせと食い続けている。彼は、頭にかつと

血が昇った。どこの犬だか知らないが、容赦はしない。

なにか投げつけるものはないかとあたりを見廻したが、生憎なにも見当らなかった。一升瓶には、まだいくらか焼酎が残っている。コップは一つしかないから、割るのが惜しい。それに、漁師が浜にガラスのかけらを散らしたりしては、いけないのだ。それかといって、まさかギターを投げつけるわけにはいかない。

ギターのそばに、空気銃があった。冬に雀を撃ちにいく銃である。そろそろ海も荒れてきたから、戸棚から出して暇をみては手入れをしている。ちょうどよかった。こいつで撃ってやれ。彼は鉛の弾をこめて、赤犬に狙いをつけた。馬鹿でかい耳が揺れておる。あの耳を撃ってやれ。

引金を引くと、赤犬はぎゃんと叫んで、宙に跳び上った。砂に降りると、腰が碎けた。それから、碎けたままの腰のまわりを、前肢だけで独楽こまのように廻った。

若者は、ちよつとびっくりした。まさか犬が独楽のように目まぐるしく廻り出すとは思わなかったからである。赤犬は、まるでつむじ風に巻かれたように、くるくると廻りながら悲鳴の尾を引いて砂丘の蔭にみえなくなった。

若者は、銃を置いて舌打ちした。しくじった。耳を撃つつもりが、尻っぽを撃っちゃった。

その後、まる一日、赤犬はどこに隠れていたのか姿をみせなかったが、翌日の日が落ちてから、町の北はずれの駄菓子屋の女主人が店を閉めようとして表へ出ると、前を赤犬がよろよろと通った。耳と尻っぽをだらりと垂れて、車の往来の激しい北の県道の方へ歩いていく。海か



ら吹きつけてくる風は、ゆうべよりも冷たかったが、そう強いというほどではなかった。それなのに、赤犬の骨張った腰は、しばしば海風に負けたかのように、横ざまに崩れそうになる。

「あの老いぼれ犬、中風かしらん。」

見送って、駄菓子屋の女主人はそう思ったが、勿論、赤犬の腰のなかには鉛の弾が撃ち込まれたままになっていることなど、撃った当人でさえ知らないのである。

赤犬は、やがて夕闇に紛れて見えなくなった。

二

女が持ってきてくれた浴衣は、まるで四角な一枚の板のようであった。それを、ぱりぱりと音をさせながら拡げていると、ふと鼻先に妻の匂いがした。

けれども、こんなところに妻がいるわけがない。妻は東京の団地の家にいて、彼の方はもう一週間もシナリオ・ハンティングの旅を続けている。

どうして、突然妻の匂いがしたのである。彼は、浴衣を拡げる手を止めて、そっとあたりを嗅いでみた。目にみえない粉になって飛び散った糊の匂いがする。廉い石鹼すずの匂いに似ている。けれども、妻がいつも使っている石鹼とは、違う匂いだ。

意識して嗅いでみると、どこにも妻の匂いなんかしなかった。どうしてさっきは、あ、妻の匂いがする、と思ったのだろう。